

## 昼は東京 夜は札幌

益子は大岡山から車で2時間半のところにある。古くから陶芸の里として知られ、本学出身の濱田庄司(1894~1978, 人間国宝)や島岡達三(1919~2007, 人間国宝)が作陶の舞台とした所だ。村田浩(1967 無機材)も父に次ぐ2代目として活躍中だ。

この村田さんの手ほどきで、益子焼に挑戦しようというのが今回の「東工大 Pottery Camp」で、本学の学生と附属高校の生徒、合わせて21名が参加し、現在進行中だ。12/14(土)と12/15(日)には村田さんと娘さんに大岡山に来て貰って、手びねり作品を作り、12/22(日)~12/24(火)は益子(地図1)に出向いて、ろくろ作品に挑んだ。これらを登り窯で焼き上げるのが今回の Pottery Camp のメインイベントで、火入れは年度末の3/25(火)~3/28(金)に予定されている。登り窯の体験は貴重な財産になるはずだ。デートや採用面接の際の話題にもなるし、何より“心”を焼成してくれる。



地図1. 陶芸の里 益子町。芳賀“青年の家”に泊まり、陶芸メッセでロクロを用いた作陶に励んだ。

正式の Pottery Camp 便り(報告書)は後ほどお届けするとして、ここでは、番外編として、印象に残った場面と言葉を紹介したい。①「昼は東京、夜は札幌」：これはクリスマスの頃の益子の気温だ。気の利いた表現で思わずメモした。ヒートテック衣類のお陰で風邪をひかずにすんだ。“野性味あふれるローテックで生き抜く益子焼”と“文明の利器ヒートテック”—両極端を味わった益子滞在だった。②宿泊先の芳賀“青年の家”には、生活目標が掲げられていた：「来たときよりも美しく」。これは整理整頓と清掃を指すのだが、所長さんは「利用者の心も」と付け足した。益子焼の釉薬に匹敵する名言だろう。③昭和36年の開所以来、青年の家に延々と受け継がれてきた食事訓も暗唱した：「つるかめのように長生きしたければ、つるつる飲むな、かめよ かめかめ(写真1)」と唱えないと箸を持たせて

貰えない。30回噛めば胃潰瘍も直るし、50回噛めば精神を病むこともないと聞くから、これを機会に実践したいものだ。

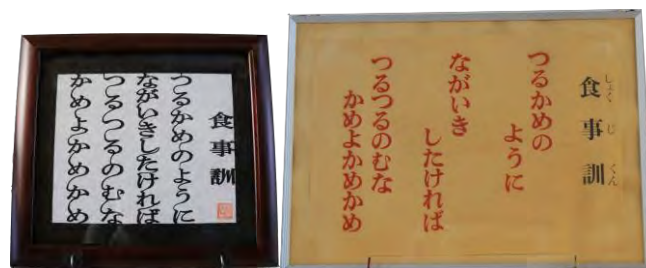


写真1. 芳賀青年の家の食事訓(小学生に人気)

④2011.3.11 東日本大震災のときは、芳賀“青年の家”でも、150人ほどの被災者を受け入れたそう。世話をした人が驚いたのは、ペットを断ったところ、ペットと一緒に寒い夜を駐車場で過ごす家族がいたことだ。「他人はペットと言いますが、私たちには家族ですから」と。もう1つ印象深かったのは、ご飯のお代わりを勧めたときの返答だ：「お代わりなんてとんでもない。温かいご飯が食べられるだけで十分です。十分過ぎます」。

⑤衝撃的だったのは、益子陶芸美術館での出会いだ。Pottery Camp の合間に、企画展「土の姿」を見に行った。“心の形”コーナーで目にした盲学校生(千葉県立千葉盲学校, 作者不詳)の作品に足が釘付けになった。そこにあったのは、研ぎ澄まされた触覚が作り上げた作品で、雷に打たれたような感覚に襲われた。普通の人が視覚情報処理に使っている脳の部分を触覚情報の処理にあてることによって、常人にはまねのできない超能力を獲得したのだろう。作品の撮影は禁止だったので、見学の様子として、尻込みする同行者にシャッターを押してもらった(写真2)。



写真2. 盲学校生の研ぎ澄まされた触覚の世界